

近江巡礼

滋賀県立琵琶湖文化館が守り伝える
祈りの至宝展

2 地蔵菩薩立像

重要文化財
一 聖 平安時代 東海寺
涼やかな目元で鼻筋を通った凛々しい表情の地蔵菩薩。グッと一点を凝視する眼差しは、静かではあるものの、溢れんばかりの力がみえる。一般的に浄土信仰の影響を受けた地蔵菩薩は、錫杖を持って六道を廻りながら衆生を救済する比正の姿であられるが、本像は錫杖を持たない古い形式の姿となる。



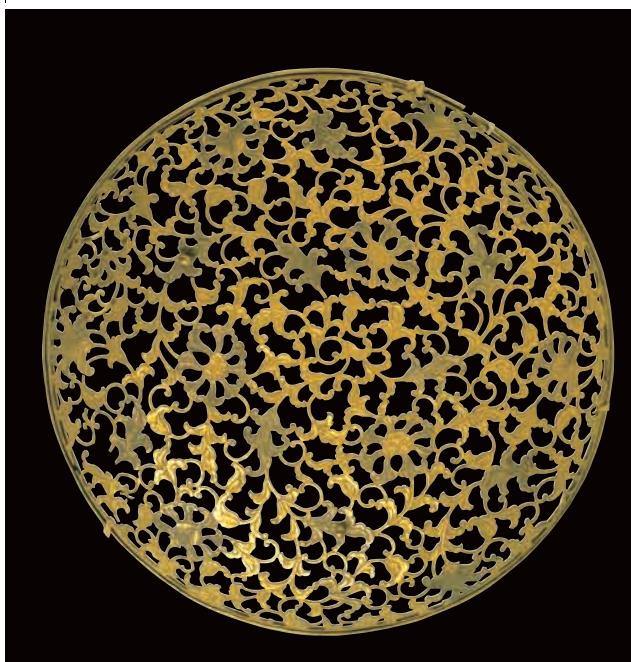
第一部

近江の仏教美術 神道美術



3 薬師如来立像

重要文化財
一 聖 奈良時代
琵琶湖の湖中から出現したという伝説をもつ薬師如来。右手で衣の端を引っつかみ、左手は天に手を上げて祈る姿。同じ表現がみられるものとして、岐阜・横瀬寺の御薬師如来立像がある。これには洗滌した最澄大師の道達から授けられたものであると推測されており、本像の伝来を考える上で興味深い。



1 透彫華籠

重要文化財
二 聖 平安・鎌倉時代 神前等
仏教の法会等で配布する花びらを入れる器で、手に持って使用する。一枚の銅板をのびして透かし彫りであらわされた室相模唐草文は伸びやかであり、蔓や葉、花は立体感をみせる。全体に鍍金を、そして花弁などの部分には鍍銀が施されており、金銀の対比が美しいわが国の金工品を代表する傑作。

4 華鬘

重要文化財
一 聖 鎌倉時代 金剛輪寺
堂内の荘厳のために長綱などに吊り下げて用いる荘厳具。インドで貴人に対して花輪(トイ)を掛ける習慣が、仏教に取り入れられたもの。銅板を透かした彫りにて蓮華唐草文をあらわしたもので、優美な唐草と大ぶりの蓮華が華やかであり、また葉や花などには細かきタネを打ち込むといった繊細さも持ち合わせた作品。



5 帝釈天立像

重要文化財
一 聖 平安時代 正徳寺
古くはインドのヴェーダ神話に登場する雷雨神であり、梵天とも早くから仏に取り入れられた。胸元のフリルは文様であり、裾に見られる衣文など、全体的に流麗な印象となる。帝釈天であるが、張つた小鼻やへへの字に結んだ目元などの顔の表情は、仏法の守護神として意志の強さを存分に感じさせる。



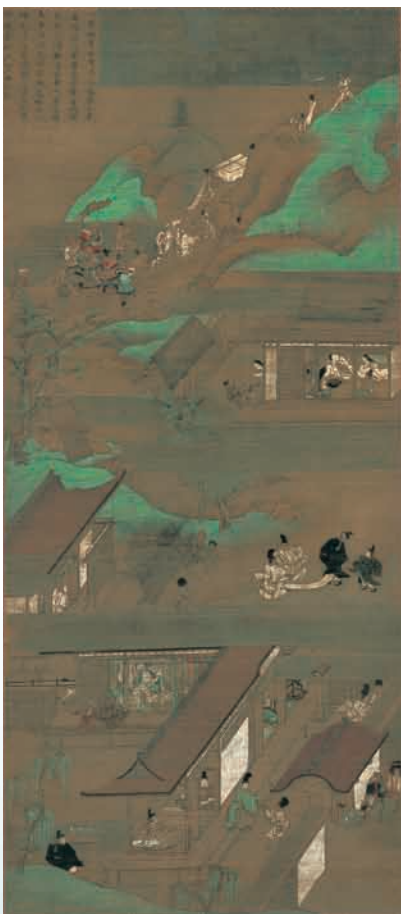
7 空也上人立像

重要文化財
一 聖 鎌倉時代 莊厳寺
諸国を遍歴した念仏上人。鹿杖をついた旅僧姿で胸に懸けた鎌を打ち鳴らしながら、念仏を唱える様子があらわされる。瘦せこけた顔、あばら骨の見える胸元が写実的。開けた口からは針金を見え、空也が「南無弥陀仏」と唱えながら「音一言六眼の阿弥陀如来」となって口から吐き出されたという伝説を表現したのかと思われる。



6 紺紙金銀交書法華経(巻首)

重要文化財
一 聖 平安時代 藤原寺
藍で染められた美しい紺色の紙を用いた写経文字は一行ごとに金泥と銀泥で交互に書かれており、行を区切る界線は銀泥で引くなど、贅沢ながら厳かな印象となる作品である。平安時代には末法思想や浄土思想などが広がり、その中で、『法華経』の写経は貴族の間で流行したが、次第に素材や加工方法に工夫を凝らした法華経が登場するようになる。



8 六道絵 人道生老病死四苦相図

重要文化財
一 鎌倉時代 聖徳寺
人が生まれてから死ぬまで必ず経験する四つの苦しみである「生老病死」について描いた作品。こどもの誕生を部屋の外で待つ男性、鏡に映った老いた自分を嘆く女性、病に伏せる女性、そして山道を歩く死者を用いる葬儀などが、見られる。逃れられない苦しみながら静かな場面として描かれており、それがかえって人の心に恐怖を与える。



9 吉山玉神像

重要文化財
一 聖 鎌倉時代 百濟寺
比叡山の麓にある日蓮大社に鎮座する二十一の神々、山王権現を描いたもの。山王曼荼羅とも、山王権現のご神体である八王子山を背景に、上七社の本地仏を中心とした神々を、また所々に山王権現の使いである神楽を奏で、天台宗では山王権現を守護神として信仰したため数多くの神楽が伝来するが、本品はよくに傑品として知られる。



10 金剛盤 五鈴鈴

重要文化財
一 聖 室町時代 願成寺
金剛盤の上に五鈴をのせたもので、密教修法を行う際に壇上におかれる。五鈴は諸尊を尊厳、敬せさせるために振り鳴らす法具であり、五鈴鈴形の柄であることから、この名がある。いずれも珍しい白銅のもの。なお、金剛盤には永禄元年(一五八八)の銘があり、制作年代の明らかなき製作として貴重である。

11 鳥禽図

重要文化財
一 聖 江戸時代 伊藤若冲筆
「色彩の魔術師」と呼ばれる伊藤若冲の作品。松の枝で休む二羽の錦鶏の姿を描いたもので、近年、若冲の作品としてあらためて紹介されるようになってきたもので、代表作『動物群像』のうちの一室中錦鶏図との比較で語られることが多い。



第二部 近世絵画

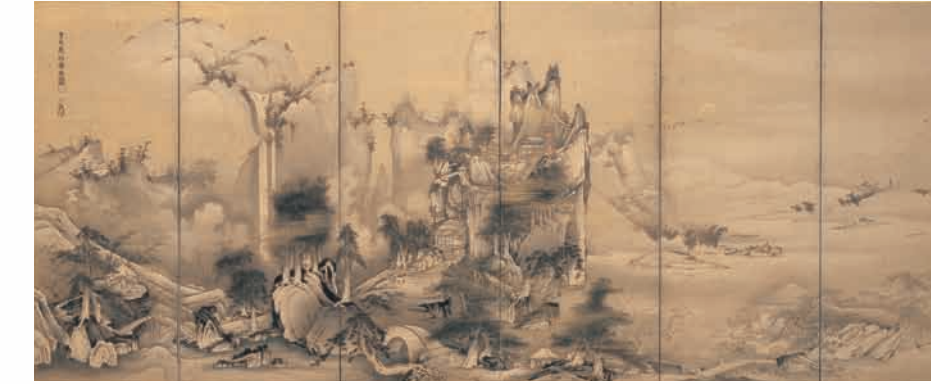
13 牡丹図

重要文化財
一 聖 中国 明代
「花の正」である牡丹を色鮮やかに描いた対幅。一幅には大きく花弁を広げた赤や白など、もう一幅には強い風に吹かれて変形した牡丹を描いた。動の場面となるなど、両幅が対称的な作品となっている。



12 楼閣山水図 曾我蕭白筆

重要文化財
六 聖 江戸時代 近江宮
「寄題の画家」と呼ばれる曾我蕭白の代表作の一つとされる屏風。梅花の咲きはる深谷に人々が行き交う姿をあらわした春の景色を右隻に、赤く染まった紅葉の色を左隻に描く静かに輝く秋の景色を、閑山水園下りも、月夜山水園の名で世に知られ、多くのファンを魅了する作品である。



14 洋大図

重要文化財
二 聖 江戸時代 琵琶湖文化館
柳の下で赤い袴を履いた若者が、前足をあげて伸び、振り返ってジッと気配をうかがっている。耳は江戸時代中期に行われた、耳取り付けがデザイン性の高いもので、大きな異質な金具を連ねた顔と大なる房の赤い袴も洒落た作りとなっている。



15 十二月図

重要文化財
六 聖 江戸時代 琵琶湖文化館
季節とともに移り変わる行事や風物を、各月ごとに一年にわたって描いたもの。五月には雨乞いにならないようにと願いを込めて高麗の薬を用いて薬玉を作り、軒に吊る月岡雪崩。雪は近江出身の作家月岡雪崩。雪崩は曾我蕭白と並び称された高田敬輔に師事し、王朝文化を題材とする古典人物画として、美人風俗画を得意とした。